

美しい多摩川フォーラム

新発見！

多摩の物語

日の出・瑞穂・昭島・立川・
国立・国分寺・多摩で出会う物語

はじめに

多摩川はかつて水量が多く、流域では、今以上に住む人の暮らしと直接結びついていました。古来、民話のみならず、神話、万葉集も伝えられています。川の氾濫、洪水などに幾度も遭い、自然と向き合ってきた歴史もあります。また、江戸への物資の輸送は、流通の発達と繁栄をもたらし、人口の膨らんだ江戸の町の水不足解消をはじめとして、今も東京の重要な水源になっています。

美しい多摩川フォーラムでは、多摩川流域の自然、食、文化が調和した質の高い「観光ビジネス」を創出し、都市部や農村部など様々な顔を持つ地域どうしでの「観光交流人口の増加」による地域の活性化を目指しています。その取り組みの中で、地域に伝わるいわれや昔話、食文化、歳時、風土など、地域独特のもので、かつ地域の人々が大事に受け継いでいるものを、地域の宝（資源）と捉えて着目し、観光や地域振興の素材として活用してみようと、「多摩の物語」の制作が始まりました。日ごろから「語り」の活動をしているメンバーでチームを編

成し、メンバー自らの取材と執筆により仕上げ、執筆者自身が「語り会」等で伝えてきております。その土地を訪れる訪問者の立場で、「語るための物語」として編んだその物語には、各地で出会う、素敵な人々、困難を生き抜いた物語、不思議な話、様々な文化が描かれています。それらは平成二十六年、平成二十八年に冊子「多摩の物語」にまとめられ、好評を博してまいりました。

今回は新型コロナウイルス感染拡大防止により、取材が思うように進まず時間がかかりましたが、チームリーダーとして長期にわたりメンバーとの連絡・ご調整をいただきました川井方子様、そしてチームの皆さんの粘りと努力でようやく三冊目が完成しました。早くコロナが収束して、多摩を訪れてもらいたい、多摩の魅力に触れてもらいたい、そんな願いがぎゅつと凝縮している一冊です。

新メンバーも加わりました。「多摩の物語」は新たな扉を開いていくことでしょう。

ご協力いただきました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

令和四年八月

美しい多摩川フォーラム副会長 平野啓子

目次

一、 日の出編	5
日の出町の昔ばなし「於奈淵」 「於奈淵」	5 7
二、 瑞穂編	11
狭山池と蛇喰い治右衛門 蛇喰い治右衛門	11 12
三、 昭島編	16
東京都のほぼ中央にある昭島市でのお話 奇跡のクジラ	16 17
四、 立川編	22
立川市のお話 子まもり地藏	22 24

五、国立編

国立の昔ばなし

27

谷保の昔ばなし 嫁どりまちのお話

29

六、国分寺編

幾筋もの湧水が流れ出る

31

「真姿の池」「お鷹の道」の名前の由来

31

真姿の池

31

七、多摩編

多摩市のおはなし

35

おしゃもじさま 唐木田物語より

35

一、日の出編

日の出町の昔ばなし 「於奈淵」

東京の奥多摩にあり、山上に「御嶽神社」を擁する標高九一九mの「御岳山」は、関東屈指のパワースポットとしても知られています。

この御岳山の東に連なるのが標高九〇二mの「日の出山」です。山頂からの眺望は素晴らしく、澄み渡った青空の日には、新宿の高層ビルやスカイツリー、丹沢や富士山などを楽しみむことが出来ます。

東京のご来光スポットとして、元日には初日の出を拝む人で賑わうそうです。

昭和三〇年に二つの村、「旧大久野村」と「旧平井村」が合併するとき、この「日の出山」にあやかり、日の出のような勢いで発展するようにと願って、命名された

のが「日の出村」、現在の「日の出町」です。

「日の出町」を流れるのが多摩川の支流である「平井川」です。

「平井川」は、「日の出山」の東側山腹に源を発し、日の出町中心部付近より草花丘陵と秋留台地の間を東に流れ、あきる野市で多摩川に合流します。

さて、「日の出町」には、数々の昔ばなしがあるそうです。

その一つ、観光名所の「鹿野大仏」に近く、多摩川五〇景三四番に選定されている「平井川 於奈淵」にまつわる伝説を紹介しましょう。



於奈淵

むかし、於奈淵は桂岩寺淵ともいった。

水量が多く大きな渦を巻き、水底は岩穴だらけであるので、村人は恐ろしくて、水の深さをはかることさえできないほどであった。

川の両岸には雑木の茂みがおおいかぶさり昼間でもうす暗く、夜になると、川天狗が出てきて大きな音を立てて飛ぶという。人が川辺にいと、淵の中から河童が出てきて、なかへ引きずり込んでしまうともいわれ、気味悪がつて誰も近寄ろうとはしなかった。このさびしい淵には古くから悲しい物語が伝えられている。

むかし、このあたりは荳と言われる村であり、ここに於奈という娘がいた。於奈の家は、お父とお母の三人暮らしの貧しい百姓であった。

天明のころは、三年間にわたる冷害で、農作物の不作が続いた。その年も八月の土用というのに、雨が降り続き、農作物の被害はかつてないほどひどいものであった。平井川の水は日に日に増して、ついには堤堰を根こそぎ流してしまった。

やがて、天候は回復したが、今度は日照りが続き、田んぼの水がたちまちかわいてしまい、田畑の作物は、ほとんど実入りを望めなくなった。村はこれまでにない大飢饉となったのである。

於奈の家でも食べものは少なくなり、心細い日が続くばかりであった。お母はとうとう病気になり、於奈とお父は困りはててしまった。

お父は畑仕事をしなければならず、於奈はお母の看病をしながら、草鞋や草履を作って売り歩いた。そして、わずかばかりの銭を貰って薬を飲ませていたが、お母の病気は悪くなるいっぼうで、とうとう於奈の手厚い看護のいかにもく死んでしまった。

そのうえ、運の悪さは重なるもので、お母を失ったばかりというのに今度はお父がたおれてしまった。於奈は、とつぜんのことに、どうしてよいかわからなかった。

しかし、「お父を助けるのはわたししかない」と自分に言いきかせ、村の大尽からお金を借りて医者をやんだ。薬をのませ、必死に看病したが、お父の病気はいっこうによくならなかつた。

於奈の心配は日に日に増すばかりであった。そして、ついにお父までもが亡くなってしまうた。於奈は、あまりの悲しみにとうとう気がふれて狂人となり、おし流された堰跡に立つと淵に身を投げて死んでしまった。そのため、のちのちこの淵を於奈淵と呼ぶようになったという。

〔引用作品〕 日の出町の昔ばなし 日の出町史編さん委員会

このような悲しい物語が伝わる「於奈淵」ですが、堰と露出した岩盤が滝となり、

両岸の生い茂った樹木とが織りなす景観は「平井川中流を巡る散策コース」の絶景ポイントの一つとなっています。

この於奈淵からほど近く、日の出町役場の東側、平井川が大きな弧を描く「塩田耕地堤」と呼ばれる辺りは、桜の名所として有名です。多摩川夢の桜街道、桜の札所・八十八カ所巡りの七十九番札所「塩田堤」として選定されています。

桜の季節には、桜並木と対岸の竹林がライトアップされます。桜の淡いピンクと竹の鮮やかな緑とのコラボレーションを楽しまれては如何でしょう。

(横倉)

二、瑞穂編

狭山池と蛇喰い治右衛門

瑞穂町は、武蔵野台地の西寄りに狭山丘陵を背にして育ってきた町です。昭和十五年十一月十日箱根ヶ崎村、石畑村、殿ヶ谷村、長岡村の四つの村が合併して出来ました。町名がなかなか決まらず、当時の東京府知事が命名したそうです。瑞穂の國で米のとれるということに付いた町名ですが、この地はもともと水田に乏しく、畑に栽培する稲である陸稲しかできない土地だといえますから皮肉なことです。

狭山丘陵の東側と西側の谷間を利用して多摩川の水を引き入れて作ったのが村山貯水池(多摩湖)と山口貯水池(狭山湖)です。この丘陵は西から東に向かって徐々に低くなっていて、この窪地の奥から二本の川が流れています。一つは山口観音の傍らから流れ出る山口川、もう一つは石川といえます。この二つの川は荒川に注い

でいます。

また、瑞穂町は都下第一のお茶の産地でもあります。狭山丘陵の西端にお茶の産地箱根ヶ崎という所があり、狭山茶がとれるのです。そこに狭山池という池があります。池の周囲の緑地には松の木や桜の木などがあり、現在は児童公園になっています。大昔はこの狭山池は笹の池と云われていました。箱根ヶ崎の地名もこの笹の池から出たと伝えられています。今日はこの笹の池にまつわる伝説を紹介いたします。



蛇喰い治右衛門

むかしむかし箱根ヶ崎に、治右衛門という大変気性のしつかりした百姓がい

ました。ある夏の夕方、治右衛門は近くにある笹の池に行つて水浴びをしていました。池を取り巻く青葉の奥で郭公が鳴いています。蛙の合唱もうるさいばかりです。治右衛門が昼間の汗をいい気持ちで流していると、腰のあたりをこそこそこそと、こそぐるものがいます。「はてな、ふなかなまずでもついているのかな」何気なく治右衛門が腰のところへ手をやると、ぬるりと何か長いものが纏わりついてきました。「どうもふなかなまずではない。うなぎでもないようだ」治右衛門が水の中をすかしてみると、そこには六尺あまりの大蛇が泳いでいて、治右衛門の腰に胴体を巻き付けようとしているではありませんか？ぎよつとして逃げ出そうとすると、大蛇は治右衛門の腰の上あたりに巻き付いたまま身体を引き締めるようにしてきました。水の中だから手で離そうとしてもうまく離れません。大蛇はしだいに治右衛門の身体を締め付けてきました。「苦しい！息が詰まりそうになってきた。このままでは」と大蛇に絞め殺されてしまうかもしれない。助けてくれ！」と叫びながら治右衛門は無我夢

中でその胴体を掴むと大蛇の首に「がぶり」と噛みつき、とうとう食い切ってしまいました。さしもの猛蛇もぐったりとなり、治右衛門の身体から離れましたが、大蛇の首筋からどくどくどくどくと流れ出した血がたちまちのうちに池の中を真っ赤に染めました。同時に空がかき曇り、あたりが地鳴り振動して灰然たる豪雨となりました。治右衛門が命からがらわが家まで逃げ帰ったことは申すまでもありません。治右衛門にかみ切られた大蛇の血は、三日三晩、管の池から流れ出ていたと言われています。



管の池から流れ出ていた

〈参考文献〉「瑞穂小史」 瑞穂町 「東京いまとむかし」(下) 山本富夫著

これで伝説はおしまいです。

この蛇は長いことこの管の池にすみついていて、村人たちに危害を加えていたわけですが、治右衛門が退治してからはそれがなくなり、池から流れ出る川を「蛇堀川」というようになり、それが訛って「残堀川」になったと云われています。この残堀川の末流は立川市を通り、やがて多摩川に合流していきます。

(富田)

東京都のほぼ中央にある昭島市でのお話

「エスクリクティウス・アキシマエンシス」って何のことかわかりでしょうか。実は、皆様よくご存知のある哺乳類の学名なのです。今日は、この学名が生まれた物語をご一緒に辿ることにしましょう。

私たちの住んでいる地球の表面は収縮や隆起を繰り返しながら、今の日本列島が誕生しました。その歴史を私たちは全く想像もできませんが、驚くことに、かつて東京の大半は海で、昭島は比較的陸に近い浅瀬だったのでないかと考えられています。そこには、多くの海の生き物が生息し、浅瀬を好む種類のクジラも悠々と泳いでいたことでしょう。

ある時、一頭のクジラが海底に横たわり、永遠の眠りにつきました。クジラの身体は、比較的早く砂などの堆積物に覆われたため、地殻変動などの影響を受けずに静かに眠り続けていました。そして、約二百万年後、なんと、昭島市の多摩川河川敷にその姿を現わしたのです。

奇跡のクジラ

昭和三十六年（一九六一年）八月二十日のことです。当時、昭島市立玉川小学校の教諭だった田島政人さんと長男の芳夫君（当時四歳）が、化石採集をするため多摩川を訪れていました。ここは、貝の化石などが発見される場所として有名なところですよ。

二人は、偶然にも地表から顔を出していた大きな動物の骨らしきものを発見し、どんどんと掘り進めていきました。

「これはかなり大きいぞ」

「お父さん、あっちにも、こっちにも、小さい穴がいっぱいあるよ」

「それは化石が眠るサインだ」

「恐竜かな！」

「でも地層からしてあり得ない。象にしては大きすぎる」

その日は、見つけた化石を岩で隠して帰宅。興奮を抑えながら、百科事典や専門書などで研究したが分からず、数日間現場を訪れ記録を取り、教師仲間や教育委員会にも相談しました。

その後、協力者は、市長はじめ市の職員、市民、考古学者など大幅に増え、現場保持のためテントを張り、教育委員会の職員が泊まり込み、後々のための正確な記録を取りながら、慎重に発掘作業を進めました。

発掘の結果、「骨の長さ十一メートル、体長十五〜六メートルの中型のヒゲクジラと思われ、世界でも珍しい貴重なもの」と、発表されたのです。市制誕

生まもない昭島市にとっては、全国にその名を知らしめる大きな出来事となりました。

この化石は、近くの小学校に運ばれ、発掘に携わった市内の教諭を中心に「地学研究会」を発足させ、放課後や土日に復元作業が始まりました。その時代の状況を考えると、それは想像を絶する時間と労力のいる地道な作業となりましたが、携わった人々の努力と情熱により一年間を費やして、昭和三十七年八月に終了しました。

ところが、その年の九月、昨夜から降り続いた大雨により、発掘場所は川の底に沈んでしまいました。一年前のあの偶然の発見がなかったら、この物語は永遠に日の目を見ることはなかったでしょう。

「アキシマクジラ」という通称名が命名されたのはその翌年のことです。発掘から間もない昭和三十九年（一九六四年）には、国立科学博物館で保管、調査されていました。現在のようなインターネットや便利な道具などなく、思

うような進展はありませんでした。

平成二十四年に群馬県立自然史博物館に移され、本格的な研究が始まり、五年に及ぶ研究の結果、「これまで世界で知られていなかったクジラの新種」とされ、学名「エスクリクティウス・アキシマエンシス」と発表されたのです。それは、あの発見から五十七年後のことでした。

現在、昭島市では、この「奇跡の物語」に感謝の念を込め、アキシマクジラを市の宝として後世に伝えるべく多くの催しが行われています。

また、化石が発掘された川の堤防沿いには、五キロに渡る「くじら運動公園」がつくられ、その一部に染井吉野およそ百本が、春には人々を楽しませてくれています。ここは「多摩川夢の桜街道」桜の札所・七十番」です。

令和二年三月、教育福祉総合センターが開館し、市民の公募による「アキシマエンシス」と言う愛称が付けられました。そのエントランスホールに一步入ると、そ

の天空には「アキシマクジラ、全長十二・五メートルの原寸大化石レプリカ」が悠々と泳いでいます。

(中西)



立川市のお話

立川市はどんな街だと思いますか。

多摩川中流域の武蔵野台地に位置しています。市の区域のほとんどは平坦ですが、南部の多摩川沿いから、武蔵野台地にかけては、立川崖線と国分寺崖線がみられます。

明治時代の頃の主な産業は農業でしたが、横浜開港により、養蚕業が砂川村を中心に発展していきました。一方、立川村では、多摩川沿いの鮎漁が盛んで鵜飼も行われていました。明治二十二年、甲武鉄道（現在のJR中央線）が新宿から立川間で開通し、その後、八王子まで延ばされました。甲武鉄道の開通は、立川市を多摩地域の中心都市に発展させました。大正十一年には立川村の山林原野に立川飛行場

も開設されました。大正の頃の民謡詩人が作詞した、立川小唄の一節には戦前の立川がよく描かれています。

空の都よ、立川よ

立川小唄

東京ばかりか 浅川 青梅

五日市から 一と走り

汽車だ 電車だ

川崎からも

空の都よ 立川よ

わたしや飛行機 風まかせ

お前の出ようで宙返り

おや くるり とせ

しよんがいな

「武蔵野の民話と伝説」より

戦後になると、米軍基地となり、その後、陸上自衛隊の駐屯地といったように、戦争と深いつながりがありました。

現在若者で賑わっているこの街にもほっこりとしたお話が伝えられています。江戸時代の頃と思われませんが、今の富士見町あたりにお住まいの鈴木さんのご先祖が、ある夜、夢の中で小さなお地蔵さんに出会いました。

子まもり地蔵

むかし、柴崎村の台（富士見町三丁目）に、ひとりのお百姓さんが住んでいました。お百姓さんは、毎日朝早くから夜おそくまで、骨身をおしまず働いていました。

ある晩のことです。お百姓さんは、夢を見ました。小さなお地蔵さまが、お百姓さんの枕もとに立っているのです。

「どうか、私を助けてください。私を助けてください。さしたら、お礼にあなたの子どもをおまもりします」お地蔵さまは、そう言って手を合せてお百姓さんをおがむのです。目をさましたお百姓さんは、「不思議なことがあるものだ」と思いながら、朝仕事に畑へ出かけていきました。今の常楽院におりるところの坂道までできた時、道のかたわらの雑木林の中に何か見られないものがあるのに気がつきました。お百姓さんが、不思議に思っ近づいて見ると、一体のお地蔵さまが、土のなかから顔を少しだけ出して横



たわっておりました。夢枕に立ったお地蔵さまを思い出してお百姓さんは、急いで堀り起こし、家に持ち帰りました。きれいに洗って、庭にすえると、お茶とご飯をあげて、お祭りをしてあげました。

それから毎日、お茶とご飯をあげて供養をつづけたところ、ほんとうに子どもたちが、病気一つしないで、元気に育つようになりました。この話が近くの村むらにひろまったので、お地蔵さまは、「子まもり地蔵」とよばれるようになり、近在からもおまいりにくるようになったということです。お百姓さんのところでは、今でも、毎朝欠かさずにお茶をあげて、おまいりをつづけています。

(立川市教育委員会発行「立川のむかし話」より)

(馬場)

五、国立編

国立の昔ばなし

昔は小さな村だった国立市は、多摩川に沿って段々に高くなっていく土地（河岸段丘）の上に発展し、一九二六年に国立音楽大学、翌年、一橋大学が次々に移転して来て、人口も民家もどんどん増えてきました。また、国立市の地名は、国分寺と立川の間にあることから、国分寺の「国」と立川の「立」を取って「国立」とつけられたそうです。

かつて、国立駅にまちのシンボルだった赤い三角屋根の「国立駅舎」がありました。

二〇二〇年四月に「旧国立駅舎」の材料を利用して駅の南口の前に再築されました。赤い



三角屋根の下には、木の椅子が置かれていて、待ち合わせをしたり休憩をしたりと、行き交う人々の憩いの場所となっています。すぐ目の前には真っすぐに広く伸びている雄大な大学通りがあり、春には桜の花が咲き誇り、この通りは見渡す限りピンク色に染まります。初夏には新緑が美しく、秋は銀杏の葉が、冬はイルミネーションが、それぞれに色鮮やかに季節を感じさせてくれます。国立市には、歴史ある谷保天満宮があり、日本最古の天満宮で、関東三大天神の一つとされており、学問の神様菅原道真公が祀られていて、受験シーズンになると、たくさんのお受験生が合格祈願に訪れます。

その昔、国立に人々の暮らしの中から生まれ、言い伝えられたお話がありました。



谷保の昔ばなし 嫁どりまちのお話

谷保の人々は甲州街道に沿って家を持ち、また青柳段丘上に点々と家がある程度の静かな村でした。そんな或る日の夕暮れ時、背中に赤子を背負ったトクちゃん、うす暗くなってきた空を見つめ泣きやまぬ背中の赤子をあやしなから、おん出し（矢川の終点）の見えるハケ上の道を「よい子だよい子だ」とゆすぶりながら歩き「早くかあちゃん帰ってこないかなあ」などと思いつながら、ふっと府中用水の方をみると、不思議な光景が、アッ！「あれはなんだ」目を凝らして見ると用水の古土手（土を小高く積み上げた昔の古い堤）のあたりに、丸い灯りのようなものが次々と浮かんで前に進んで行くのです。灯りなど無い筈なのに、と考えていると、フッ！とおじいさんから聞いたことを思い出したのです。「用水の古土手に灯りが並んだら、それは狐の嫁とりの行列だから決して見ては駄目だ、赤子には見せるな」と言われた事でした。ブル、ブルツと

震えながら大急ぎで家に帰ったのでした。昔から、狐は人を化かすと言われ味の悪い動物とされていましたが、米作りを主とした時代は「五穀豊穰」の神の使いとして、家々の屋敷の内に祠を造り、赤い鳥居を建てて大切に祀られていました。そして、何時のころからか、府中用水と谷保用水の分岐点のあたりが「嫁とりまち」と言われるようになったそうです。（まちは、水を堰止めて調節するところ）

このお話は、くにたちの生活誌・くにたちの暮らしを記録する会・代表佐伯安子さんのお書きになった文章を参考にさせていただきました。

そして国立市は、多摩川が運んだ豊かな土とママ下湧水や府中用水などの豊かな水にも恵まれて、古くから稲作や農業が盛んなところでした。暮らしやすい学園都市であり、また都市の文化も都市の農業もどちらも楽しむことができ、自然の恵みを身近で体験でき心身ともにリフレッシュできる街です。

（渡辺）

六、 国分寺 編

幾筋もの湧水が流れ出る

「真姿の池」「お鷹の道」の名前の由来

真姿の池

玉造小町は、人から絶世の美女と言われ、自分でもその美しさを誇りに思っていました。

しかし、不治の病にかかり、その美しい容姿が、醜く変わると、美しさを褒めたたえた人々は、見向きもしなくなり、近寄っても来ませんでした。

小町は、何とかこの病を治したいと、あちらこちらの医者を訪ね、神や仏に祈りましたが、病は重くなるばかりでした。

ある時、遠く武蔵国分寺の薬師如来は、靈験あらたかで、どのような病も治してくれると聞いた小町は、さっそく武蔵国へ旅立つことにしました。

長い旅のすえ、武蔵国分寺へ着いた小町は、すぐに薬師如来の前で一心に祈りました。毎日毎日祈りつづけて、二十一日目に、一人の童子が現われ、小町を池のほとりへ誘い「この池の水で、身体を洗うべし」と言って姿を消しました。

小町は薬師如来のお告げと信じ、池の水で、身体を洗うと、たちまち病は治り、元の通りの美しい姿に戻りました。

このことを知った人々は、この池を「真姿の池」と呼ぶようになりました。

「こくぶんじむかしむかし」より



奈良時代中頃、時の天皇（聖武天皇）が、疫病、飢饉から国を守るため諸国に国分寺の建立を命じました。中でも武蔵国は国府に近く都に通じる東山道武蔵路沿いの豊かな場所にありました。

国分寺の村々は江戸時代、尾張徳川家のお鷹場に指定されて、「お鷹の道」の名前はそれに由来します。今も、「お鷹の道」「真姿の池」沿いを流れる湧水は、夏は蛍を楽しみ、野菜を洗う風景も見られます。

また、国分寺市を流れる野川は、武蔵国分寺の旧地の、日立製作所中央研究所の構内にある、大池を水源とします。

水源のある庭園は、「多摩川夢の桜街道」桜の札所・六十二番」にあたり、春は桜、秋は紅葉とそれぞれ一日ずつ、一般公開されます。

毎年、庭園公開の日は、多くの人たちが行列して、また、模擬店なども出て、一日を楽しみます。

令和四年二月現在、新型コロナウイルス感染症拡大のため、公開は中止されています。

ます。今年の桜は皆さんを楽しませてくれるでしょうか？

この野川は、「お鷹の道」「真姿の池」の湧水を一里塚で集め、入間川、仙川を合流、やがて世田谷区の二子玉川で奥多摩から流れ来た多摩川と合流し、東京湾へと流れ込みます。

(川井)

七、多摩編

多摩市のおはなし

多摩ニュータウンと呼ばれて半世紀、ここ、唐木田は近代的な街として多くの人に親しまれています。

さてこの多摩市にも昔から語り継がれている物語があります。

おしゃもじさま 唐木田物語より

むかし このむらの とよぐちやまに、 おおきなきのしげった もりが あった。

もりのなかには、 いしがみさまを まつった ほこらがあった。その もり

のはずれに ひとりの おばあさんと あやという ちいさな おんなのこ
が すんでいた。あやのおかあさんは あやが うまれて すぐに しんでし
まい、おじいさんと おとうさんは とおくのくにの いくさに いったきり
かえって こなかった。

そのころは さくもつが よくみのらないとしがつづいて、むらのひとびと
は まずしいくらしを していた。

おばあさんは せっせとはたらき、あやも いっしょうけんめい てつだっ
た。でも、ふたりのくらしは たべものにも こまる ありさまだった。

それでも おばあさんは ごはんを たくたびに いしがみさまへの、すこ
しばかりのおそなえを わすれなかった。いしがみさまは むかしから おば
あさんのいえの まもりがみだった。

あるひ あやは おばあさんに たずねた。

「ばあちゃんは いつも いしがみさまに なにを おねがいしているの」

「あやが はやく おおきくなるように それと じいちゃんと とうちゃん
が はやく かえってくるように おねがいしているんだよ」と、おばあさん
は いった。

あるとこのこと、このむらに わるい やまいが はやった。あやも たか
いねつをだして、いくにちも いくにちも ねこんでしまった。おばあさん
は よるもねないで かんびようしたが、なかなか なおらなかった。おばあ
さんは とうとう つかれきって ねむってしまった。

すると、ゆめのなかに おじいさんと あやのおとうさん、おかあさんがあ
らわれて、「ばあさんや、わしらは あのよという とおくのくにに きてし
まい、もう いえには かえることが できないんだよ。おまえたち ふたり
にはくろうをかけて すまないなあ。あやが はやく よくなるように、あす
のあさ いしがみさまに おねがいしておいで」 つぎのあさ、おばあさんは
いそいで いしがみさまに ゆき、あやの やまいのことを おねがいをした。

すると、「ここに ある こめを もってかえって あやに たべさせるがよい」という、いしがみさまの こえがした。

そこで、さっそく おばあさんは その おこめで ごはんをたいて あやに たべさせようとした。

けれども あやは たかいねつで、くるしくて たべるげんきもなかった。

「あや、このごはんは いしがみさまが くださった おこめで たいんだよ」おばあさんに いわれて やっと ひとくちたべた。あやは、くるしさが ほんのすこし らくになったような きがした。もうひとくち たべると また すこし らくになった。

もうひとくち もうひとくちと たべるうち、とうとう ぜんぶ たべてしまった。あやが たべおわったとたん、おばあさんは たいへんな ことになりがかった。「あつ、いしがみさまの おそなえを わすれていた」あわてて おかまを のぞいてみると、もうおこげも のこっていない。おしやもじに、

ごはんつぶが すこし ついでいるだけ。

「こまった もうしわけない」と おばあさんは おおいそぎで いしがみさまの ところに 行って、ごはんが わずかにすうつぶついているその おしやもじを おそなえした。

すると、あれほど くるしんでいた あやは みるみる ねつが さがって、そのひのうちに おきだせるようになった。そして、あくるひには すっかり げんきになって はたけしごとを てつだえるようになった。

この はなしは たちまち むらじゆうに しれわたり、びょうにんのいる うちでは、みな いしがみさまに おしやもじをおそなえした。すると どここのうちのびょうにんも ねつが さがって、すっかり げんきになった ということだ。それからというもの むらの ひとびとは、いしがみさまを おしやもじさまと よぶようになったと伝えられております。

遠い昔の素朴な村人たちの姿が、目に浮かんでくるようです。先日、唐木田を訪れた際、静かな佇まいの中で今もなお大切に祀られているおしゃもじさまに、歴史の重みを感じました。

思わず手を合わせ心の中でコロナの収束を念じ頭を垂れました。多摩川は今日もゆるやかに流れていきます。

遙かに霊峰富士の山を、そして近くに美しい多摩の山並みを望みながら六郷へと下っていきます。



(富田)

文責

川井方子 富田和美 富田元子 中西邦子
馬場エリカ 横倉 充 渡辺真紀(あいうえお順)

協力

青梅市立青梅図書館 日の出町立図書館 日の出町教育委員会 日の出町観光協会
八王子市中央図書館 立川市中央図書館 立川市歴史民俗資料館 くにたち中央図書館
くにたち郷土文化館 国分寺本多図書館 武蔵国分寺跡資料館 多摩市関戸図書館
NHK学園くにたちオープンスクール NHK学園くにたちオープンスクール「平野啓子の
語りの世界」受講者全員 平野啓子事務所オフィスエイワン有会社
美しい多摩川フォーラム地元出身の会員、地元の皆様 カタリザーの会(主宰・平野啓子)

調整・連絡 川井方子(チームリーダー)

指 導 平野啓子(美しい多摩川フォーラム副会長)

企画・製作 美しい多摩川フォーラム・教育文化部会

制作 美しい多摩川フォーラム

発行 美しい多摩川フォーラム

東京都青梅市勝沼三―六五 青梅信用金庫内

電話(0428)2415632

発行日 二〇二二(令和四)年八月三十日